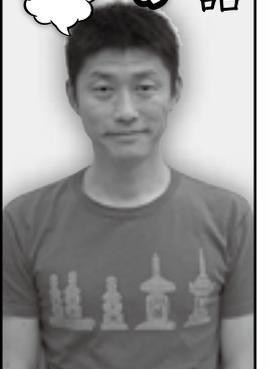


おしえて 石造美術オタクのひとこと

6角柱塔



高橋晋也/庵治産地の石材加工メーカーである(有)翼石材企画室に籍を置き、平成21年より、究極のこだわり製品として『世伝石塔』シリーズを開発、総合プロデューサーとして庵治・牟礼産地の優れた加工技術を持つ『庵治石工業』によって制作している。中世の石造物をこよなく愛し、昨年4月からは、中世の石塔を中心に勉強をする会、『翼塾』を開講。

こんにちは、(有)翼石材・企画室の高橋です。今回は「角柱塔」についてお話(ひとこと)をさせていただきます。

角柱塔とは、今日最も多く建立されている和型や和墓といわれる石塔であり、墓地へ行けば必ずといってよいほど目にします。

仏教考古学者の石田茂作先生は『日本仏塔』(講談社)の中で岡山県赤磐市の千光寺層塔三年在銘の角柱塔(形式は方柱形の頂部に四角錐状をつくり、頭部に横二条線を切り込んだもので板碑形を立体的にした形)を紹介し、「ここにおいて内容外観共にふさわしい仏塔の新種が誕生したといえる。」と、述べられています。

では、どのように形式が変化していったか簡単に説明したいと思います。まず、板碑の特徴である頂部山形の下にある二条線が省略されます。そして、

頭部は江戸時代中期から丸みをもつ櫛型になり、江戸時代後期から大正期には、板状だった塔身の正面幅と側面幅の比が徐々に小さくなり、現在

のようになつてきています。同時に頭部も櫛形から徐々に変化をし、最終的には現在のようになっています。

刻字についても塔身側面は没年月日のみでしたが、江戸時代後期になると俗名や享年も追加され、明治・大正期以降は、正面上に「家代々之墓」「家累代々之墓」等、背面には造立年月日・造立者が彫刻され、水鉢には家紋が刻出されます。

昭和に入ると現在では当たり前前の加工ですが、磨き仕上げが施されるようになっています。

そして、造立の内容についても変化がみられます。そもそも仏塔は、仏像や写経を安置・奉安して礼拝供養をすることに意味があり、その供養で得られた功德によつて死者と生者の利益と幸せ(救済)が約束されます。しかし、現在の角柱塔は、どちらかといえば故人の霊が眠っていることを示す記念碑の意味や、「家代々之墓」等を彫刻することによって家のシンボルとしてのお墓(家墓)の意味が強くなっています。

内容の変化については少し否定的な書き方をしましたが、形式・内容どちらの変化についても私の解釈は、日本人のお墓の現象として捉えています。

というのも、石文化研究所所長 小島宏允先生が『月刊石材(石文社)』の連載・第1回「日本人にとつてお墓とは何か」を、日本人のお墓の本質と現象で、

「私は「日本人のお墓」を、「本質」と「現象」の二つの要素に分けて、この二要素(あるいは二つの面)で構成されている、としている。

いうまでもなく「現象」は、目などの感覚器官の働きによつて知ることのできる事象のこと、「お墓」など、はつきりと目に見える外に現れた「かたち」(現象)が認識できるものは、その「現象(外形)」の占めるウェイトは大きい。

これに対して「日本人のお墓」が本来有している性質を「宗教的な意味」と大まかに定義して、この二つを分類しておこう。このうち「現象」であるお墓の外形は、常に時代や地域によつて大きな変化がみられ、今日でも

なお変化し続ける、という特徴がある。つまり「現象」とは「変化する」という重要な特徴があるといつてよいだろう。

これに対して「本質」は、時代や地域(時空)などによつて変化しないもので、いわば恒常的なもの、不変なもの、ということができる。

例えば「お墓の本質」が時代や地域によつていとも変化して一定でなかったら、それはもはや「本質」とはいえない。本質が常に変化していたら、お墓をお墓として成り立たせる「それ独自の性質」でなくなるからだ。そういうものは決して「お墓」と呼べなくなる。現に墓地に行つてみると、さまざまな形のお墓が立ち並んでいるが、それらがすべてお墓といわれるのは、お墓としての本質をもっているからに他ならない。こうした時代や地域を越えて、その多様な外形の変化にもかかわらず、つねに、それらの「お墓をお墓たらしめているもの」を「本質」といふ。

と、述べられております。また、日本人のお墓の本質と現象については講義もしていただき、私の中ではものすごく納得しています。そして、いうまでもなく日本人のお墓の本質は、死者と生者の幸せを願ひ造立されます。業界人として一人でも多くの方に、日本人のお墓の本質を伝えていきたいと思ひます。

内容の変化については少し否定的な書き方をしましたが、形式・内容どちらの変化についても私の解釈は、日本人のお墓の現象として捉えています。

というのも、石文化研究所所長 小島宏允先生が『月刊石材(石文社)』の連載・第1回「日本人にとつてお墓とは何か」を、日本人のお墓の本質と現象で、

「私は「日本人のお墓」を、「本質」と「現象」の二つの要素に分けて、この二要素(あるいは二つの面)で構成されている、としている。

いうまでもなく「現象」は、目などの感覚器官の働きによつて知ることのできる事象のこと、「お墓」など、はつきりと目に見える外に現れた「かたち」(現象)が認識できるものは、その「現象(外形)」の占めるウェイトは大きい。

これに対して「日本人のお墓」が本来有している性質を「宗教的な意味」と大まかに定義して、この二つを分類しておこう。このうち「現象」であるお墓の外形は、常に時代や地域によつて大きな変化がみられ、今日でも



人名墓 (香川県丸亀市本島)

今回ご紹介するのは17世紀初頭に造立された人名(にんみょう)墓と呼ばれる大型で特異な墓標です。人名とは豊臣秀吉の時代に塩飽諸島(瀬戸内海に浮かぶ諸島)1250石の領有を許された650人の船方の呼び名であり、人名墓は塩飽島民の墓であることが理解できます。この墓標の多くが1627年に造立された逆修塔であることから、計画的に造立されたシンボリックな性格の墓標と指摘されています。特徴は多くが竿高300cm前後を測り大型であり、また、中世板碑の要素と、近世墓標の要素が認められ、中世から近世への過渡的な性格を有しています。

内容の変化については少し否定的な書き方をしましたが、形式・内容どちらの変化についても私の解釈は、日本人のお墓の現象として捉えています。

というのも、石文化研究所所長 小島宏允先生が『月刊石材(石文社)』の連載・第1回「日本人にとつてお墓とは何か」を、日本人のお墓の本質と現象で、

「私は「日本人のお墓」を、「本質」と「現象」の二つの要素に分けて、この二要素(あるいは二つの面)で構成されている、としている。

いうまでもなく「現象」は、目などの感覚器官の働きによつて知ることのできる事象のこと、「お墓」など、はつきりと目に見える外に現れた「かたち」(現象)が認識できるものは、その「現象(外形)」の占めるウェイトは大きい。

これに対して「日本人のお墓」が本来有している性質を「宗教的な意味」と大まかに定義して、この二つを分類しておこう。このうち「現象」であるお墓の外形は、常に時代や地域によつて大きな変化がみられ、今日でも

内容の変化については少し否定的な書き方をしましたが、形式・内容どちらの変化についても私の解釈は、日本人のお墓の現象として捉えています。

というのも、石文化研究所所長 小島宏允先生が『月刊石材(石文社)』の連載・第1回「日本人にとつてお墓とは何か」を、日本人のお墓の本質と現象で、

「私は「日本人のお墓」を、「本質」と「現象」の二つの要素に分けて、この二要素(あるいは二つの面)で構成されている、としている。

いうまでもなく「現象」は、目などの感覚器官の働きによつて知ることのできる事象のこと、「お墓」など、はつきりと目に見える外に現れた「かたち」(現象)が認識できるものは、その「現象(外形)」の占めるウェイトは大きい。

これに対して「日本人のお墓」が本来有している性質を「宗教的な意味」と大まかに定義して、この二つを分類しておこう。このうち「現象」であるお墓の外形は、常に時代や地域によつて大きな変化がみられ、今日でも

なお変化し続ける、という特徴がある。つまり「現象」とは「変化する」という重要な特徴があるといつてよいだろう。

これに対して「本質」は、時代や地域(時空)などによつて変化しないもので、いわば恒常的なもの、不変なもの、ということができる。

例えば「お墓の本質」が時代や地域によつていとも変化して一定でなかったら、それはもはや「本質」とはいえない。本質が常に変化していたら、お墓をお墓として成り立たせる「それ独自の性質」でなくなるからだ。そういうものは決して「お墓」と呼べなくなる。現に墓地に行つてみると、さまざまな形のお墓が立ち並んでいるが、それらがすべてお墓といわれるのは、お墓としての本質をもっているからに他ならない。こうした時代や地域を越えて、その多様な外形の変化にもかかわらず、つねに、それらの「お墓をお墓たらしめているもの」を「本質」といふ。

と、述べられております。また、日本人のお墓の本質と現象については講義もしていただき、私の中ではものすごく納得しています。そして、いうまでもなく日本人のお墓の本質は、死者と生者の幸せを願ひ造立されます。業界人として一人でも多くの方に、日本人のお墓の本質を伝えていきたいと思ひます。

日本人のお墓の本質を学ぶ『翼塾』

第4回「京都・滋賀石造美術現地研修」開催
第5回「瀬戸内海地域石造美術現地研修」開催

弊紙連載「おしえて 見学。中には通常ではお墓の話石造美術オタクのひとこと」でお馴染みの高橋晋也氏(45歳)を中心に設立された『翼塾』では4月17日(19日)に第4回翼塾(京都・滋賀石造美術現地研修)を、10月28(30日)に第5回翼塾(瀬戸内海地域石造美術現地研修)を開催した。

両回とも東北・中部・関西・四国・九州などから会員が参加し、高橋氏によるガイドのもと各地域の石造物を



第5回参加者



第4回参加者

石材総合商社

七山みかげ(天山)・やさとみかげ 国産銘石各種原石・荒石取扱い

石彩日本

株式会社石彩

濱本勝之 久保聡秀

〒468-0011 愛知県名古屋市中区天白区平針2丁目1009番地 平針ビル305号室
TEL:052-806-5050 FAX:052-806-5071 E-mail: sekisai@snow.ocn.ne.jp

大島石 大丁場

OCHIHISA GROUP

人々と共に歩む歴史を
これまでも、これからも。

大島石特級採掘元

〒794-2201 愛媛県今治市宮窪早川1077番地
TEL.0897-86-2541 / FAX.0897-86-3458

各種寸法原石を常備/小口配達も致します

http://ochihisa.com/
石の総合商社：(株)越智久石材センター、(有)越智久産業、(株)新愛興産業